

## 十二月定例聞法会のご案内

\*期 日 平成十三年十二月十六日（日曜日）

\*時 間 （昼席）午後一時三十分より （夜席）午後七時より

\*会 場 （昼席）心光寺本堂 （夜席）心光寺庫裏

\*講 師 大石 法夫 先生（広島市在住）

### 心光寺からのお便り

北風に吹きさらされて、

木の葉がばらばらと空に舞  
つては落ちていきます。い

よいよ冬の到来です。試練  
の季節への突入です。皆様  
にはお変わりなくお過ごし  
でしょうか。

さてこの度は二ヶ月ぶり  
の聞法会となります。一ヶ  
月お休みすると、随分間が  
あいた感じがするものでは  
ね。ほんとうに久しぶりの  
聞法会という感じです。久  
しぶりにまた大石先生をお  
迎えることができ、また  
みなさん方とも再会できる  
ことを喜んでいます。



二日間の春の彼岸会の法話を終えて、みんなに合掌しつつ心光寺を辞する  
大石法夫先生（H13.3.18.心光寺にて）

ところで大石先生がご師匠の藤解<sup>とうげ</sup>先生のもとに入門されたのは昭和二十二年、大石先  
生二十六歳のときでした。その後藤解先生がお亡くなりになったのが昭和六十年二月、  
大石先生六十四歳のときです。そして大石先生が回心され一心帰命の世界に転入された

のは、同じ年の九月頃です。その間、実に三十八年の歳月を要しています。その間、大石先生が藤解先生の厳しい化導から身をそらすことなく、一筋の道をただひたすらに歩み続けてこられたのは、本当に驚くべきことです。このことについては前回のお便りの中で書かせていただきました。私はかねがね、先生のこの三十八年間の、ぶれることのない歩みを支えてきたものは一体何だったのだろうか、何がそうさせたのだろうかと思っていました。

ところが先日ふとしたことから、以前買って本棚の隅に置いてあった『宗教時代』という本を再び手にすることがありました。この本は、人はどんなときどんなかたちで宗教に向かうのか、それがどうやって個人の中でのつびきならないものになっていくのか、そのところを学者や教団の側からではなく、ごく日常的に信仰をもつ普通の人たちの場所を探っていきたいという試みで、日本古来の土産信仰から、仏教、キリスト教、イスラム教、さらに様々の新興宗教まで含めた幅広い分野の中から、四十七人の人を取り上げ、インタビューをおこなった貴重な記録です。巻末をみると、昭和六十三年三月二日晶文社発行となっています。ぶ厚い本なので、私はその中から真宗大谷派関係をはじめとする一部の方々のものだけを読み、あとは目を通さないまま本箱にしまっていました。ところが先日必要があつて、再びその本を手に取りました。そのときふと、「もしかしたら」という思いがひらめきました。そこで急いで目次に目を通してみると、あるではありませんか。「死」という項目のところに、「人間魚雷―一度死んで戦争が終わって、もう一度死にました―」という見出しが！。あわててその頁を開いてみると、大石法夫（六十六歳）とありました。何という迂闊うかつなことでしょう。既に十年前から、私は大石先生の言葉を記録した資料を手元に持っていたのでした。

まるで偶然立ち寄った古道具屋の奥で、きわめつけの逸品に巡りあつたような思いでした。驚喜し、一気に読みました。そして強い感銘を受けました。そこには回天時代をふりかえりつつ、その頃の内面を何の飾り気もなく淡々と語られる、大石先生の十数年前の肉声がありました。一読後、私は先生の三十八年間の歩みを支えてきた原点が、ここにあることを感じました。先生の生涯の上に、具体的に生きてはたらく本願の歩みを見、そのことを通じて、同じく我々の上にもはたらきつづける本願に直接触れていこうとする我々にとつて、このインタビュー記録はまことに貴重なものだと思えます。

そこで少し長くなりますが、そのインタビュー記録の全文を次に紹介することにします。



## 人間魚雷（浄土真宗）

大石法夫（六十六歳）

山肌を削り取って、新興住宅地が広がる広島市の東の郊外。その家並みの途切れたあたりに、浄土真宗の寺がある。背後の疎らな雑木林が静けさをつくっている法林寺、住職の大石さんは昼の説教を終えたばかりだった。すらりと背の高い痩せた身体を墨染めの衣に包み、剃りあげた頭が青い。

「私はもともと在家でしたからね、こういうナリを見たら、昔の戦友たちはけげんな感じを持つだろうと思います。」

「光（山口県光市）にいた頃は、命をかけた厳しい生活でありました。しかし、その後の生き方にひとつの転機を与えてくれた、わたしにとっては懐かしくも貴重な時代だったですねえ」

戦争末期、光には海軍の秘密特攻基地があり、人間魚雷「回天」の搭乗員たちが猛烈な訓練に励んでいた。

私は京大の法学部二年のとき、学徒出陣で応召したんです。「回天」の搭乗員を志願したのは昭和十九年の十月、その年の暮れに光基地にまいりました。

当時、回天隊には徳山の天津島、平生、光の三つの基地がありましたが、光基地には海兵出身の士官、学徒出身の士官、さらに予科練出身者と、合わせて二十人近くがおりました。

私と同じ学徒出身八期の十人は少尉ばかりでしたが、一部屋で寝起きし、そのキャップを東大出身の和田稔さんが務めていました。彼はわれわれのなかの首席搭乗員でした。それから、われわれの指導にあっていたのが、現在、京都博物館の館長さんの上山春平さんでしたよ。

上山さんは西田幾多郎のお弟子でしたから、よく仏教の話をしてくださいました。ああいう極限状況の日々にあっても、どこことなく余裕があるように感じられましたね。

毎日の訓練はきびしかったですねえ。ひとつ操作を誤ると殉職でしょう。毎日が死に直面した生活でした……。

いまの若い方はご存知かどうかわかりませんが、「回天」というのは本来は潜水艦から発射されるべき九三式魚雷を人間が直接操縦するんです。潜航、浮上、変針、変速が

自在で、五十六キロの速度で航行できました。魚雷の頭に一・五トンの爆弾をつめて固

定し、中央に小型潜望鏡を取り付けた搭乗席があつて、そこに乗り込むわけです。搭乗席はとても狭かったですね。直径一メートルしかなくて、脚を曲げて座るのがやつとでありました。

操縦は高度の熟練を要しましたねえ。一瞬の不注意から光基地の海底の泥の中に突つ込むか、島に艇もろともぶつかるか。ですから、訓練中は必ず、追跡艇が事故にそなえていたわけなんです。

搭乗者は、熟練した者から回天戦に出撃していくことになっていました。だいたい四基から六基の回天を積んだ潜水艦が、潜航したまま敵艦近くに忍び寄り、潜望鏡を覗いている潜水艦の艦長が電話で回天搭



山口県徳山市の徳山回天記念館の庭に展示されている「回天」の模型

乗者に指示を伝えるわけです。敵艦の位置、方向、速度を受け取った「回天」の搭乗者は自分で方位角を計算して、敵艦めがけてぶつかっていく。非情な作戦でありました。ですから、特攻訓練を受けるときも、死の淵ギリギリまで行かねばなりません。一日が終わったときに、こう考えるんですよ。生まれて物心がついてから、競争にばかり明け暮れてきたなあ、と。私たちの訓練というのは、必ず出撃して、死んで手柄を立てなきゃあならんというものでしたからね。一日一日が競争でしたよ。名誉の戦死という手柄を立てるための競争をしていたわけなんです。

心は毎日、地獄に生きておりましたよ。自分は人間に生まれてよかったという平和な気持ちを持った一日でも味わったことがあったらどうか。そう思わざるを得ませんでした。

それはね、光基地に派遣されて始めて味わった気持ちでした。生きることにについて、真剣に考えさせられた最初でもありませんね。自分のものでありながら、自分では全く

責任がもてないという人生についてですねえ。

人間に生まれてよかったという心の問題を解決するにはどうしたらいいか、それがわかりませんでしたよ。そういうとき、上山さんから仏教のお話を伺ったわけなんです。ああ、もつと仏教の教えを聞かしてもらいたいという気になりました、上山指揮官といっしょに光の郊外にある如宝寺という禅寺へ参ったことがありました。

忘れられないのは、二十年の四月のことです。桜の花が美しく咲いておりました。上山さんも和田さんも、「今度はわしらが出撃する番じゃ。来年の春には桜は見られんじやろう。」といいましたね、日曜日に外出した折、私は如宝寺へもう一度ひとりで行きました。

振り返ってみれば、その頃が入門でしたね。しかし、終戦になるとはつゆ思っていないから、自分の順番が来るまでに何とか心の準備をつけておきたかったという、それだけでした。

自分の順番を待つあいだ、寺に通いつづけました。それが、仏教でいう宿縁だったのでしょうか。

ですからね、厳しかったと同時に、光時代が懐かしくもあるんです。やはり死というものとお決させられただけに、その後の私の生き方に決定的な影響を与えられましたよ。おかしな方になるかもしれませんが、もし戦争がなかったら、私は仏法の教えをいただくことはなかったでしょう。

人生を真剣に生きるとはどういうことか。人間は生きていくかぎり、いかに生きるかがつねに課題でありますからね。自分の人生に責任があるわけです。

そういう意味で、私は光時代が忘れられないんです。しかし、日本全体にとってはどうでしょうか。日本が戦争したという試練がね、その後いかに今日に結びついているか、そのことをしっかり肝に銘じつづけることが、あの戦争で亡くなった大勢の方々の霊に報いる道だと、私はそう思っておるんです。

回天戦では、一四〇人が戦死しております。さらに殉職者が十五人、自殺者が二人――。和田稔さんも、殉職者のひとりです。

和田さんは上山さんを首席搭乗員とする五人の出撃隊の次席としてね、二十年の五月二八日、イ号三六三潜水艦に搭乗して沖縄戦に出撃したんです。しかし、発進の機会を得ずに光基地に帰投しましてね。その後、七月三十一日に再出撃することになって、それに備えておりましたが、六日前の訓練中の事故で殉職されたんです、七月二五日の早朝のことでした……。

事故当時は海底に突入したまま、和田さんの乗っていた「回天」は行方不明でした。発見されたのは、終戦一カ月後なんです。吹き荒れた嵐のおかげで浮上して、近くの島に流れついたんです。漁師さんが搭乗席の蓋を開けてみると、なかにあぐらをかいたままの和田さんの遺体があったそうです。海底に激突して即死というわけではなく、十八時間も孤独と絶望に耐えての死だったということもわかりましてね。

遺体の傍らに、小さなトランクがあり、なかに沖縄戦出撃から光に帰投するまでの心の軌跡を書き記したノートが納まっていたそうです。軍刀もありました。われわれは海軍の搭乗員でしたから、軍刀はいらないうなものでしたけど、みんな持っていました。死に切れない局面での自決用ということだったのかもしれませんが。

終戦の年の秋、上山さんが一週間ばかり私の家に来ていたことがあるんですが、和田さんの遺品を持っておられて、軍刀を一時預かってくれといわれたんです。戦後は軍刀の所持が許されませんでしたからね。

警察から、刀剣類を出せという指令がきて、私は自分の軍刀は差し出しました。しかし、和田さんの軍刀は遺族に送り返すのが筋だろうと思つて、沼津の実家へ手紙を出したんです。そしたら、妹さんから返事がきて、「家では兄のことは禁句になっています。いま送り返していただくと悲しみがぶり返す種になりますから、兄の軍刀は大石さまに差し上げます」ということになりましたね。

そのとき、私はすでに僧籍に入っておりましたから、和田さんの月命日にはお寺の納骨堂へ刀を持って行って、お経をあげさせてもらっていました。しかし警察の勧告は厳しくて、許可を得ずに軍刀を所持している者は処罰の対象になるという通達が再々ならずでしたから、仕方なしに警察に許可をもらいに行ったんです。

そこで私は自分の正体を見せられたような気がしたんですよ……。鑑定係の人が銘を見て、「これは時価二〇万円はしますよ」と驚いたんです。当時としては大変な大金です。私、それを聞きまして、つい儲けたような気がしたんですよ。

私のお師匠さまが、「僧侶は不要な物は持つべきではない」とよくおっしゃっていました。それが、金目のことを聞いて得したという気がするとはどういうことか、ましてや亡くなられた方の物をもらつてですねえ。大変にすまんと思いました。こういう者がいかにお経をあげてもね、ほんとうの死者の救いにはなりません。両親にお返しできないのなら、妹さんに引き取ってもらおうと思ひ、自分の心の動揺をためたためた手紙を出したんです。軍刀もいっしょに郵送しました。物や金に迷うことに終わる人間であつ

ては、私の道が行き詰まってしまふ。私自身の問題としてですね、そうさせてもらったわけなんです。

光時代に、心は地獄という毎日を過ごしながら、戦争が終わってみれば、私はもう一度しななきやあならんことになったわけです。信じきっておった世界がガラガラと崩れ落ちていったわけですから。しかし、また地獄のような体験を繰り返すわけにはいかない。

私は親鸞聖人さまの御教えを受けるようになりました。人間には肉体的な死は一度に過ぎないが、精神的な死は二度あるといわれました、つくづく考えさせられましたね。いい物をもらえば儲けたと思ひ、それが当たらなかつたら恨んだり、愚痴をこぼしたり……。これは戦争の時代であろうと、平和の時代であろうと人間一生の事実です。そのなかで、ただ損得を争っていれば、人間に生まれてよかつたという気持ちは持てないと思ふんですよ。

人間は日々迷う弱いものである。その弱い人間が、弱いまんまで仏さまのお慈悲によつて救われるという教えを受けましてね、人間の考えではわからないような問題も仏さまの世界から見れば解決がつくということ、私は申し上げずにはおれないです。

仏教では「宿業」ということをいいますがね、生きているかぎり、人間は欲にとらわれる宿業の身なんだから、どうしても苦悩から逃れられない存在なんだと思います。そういうことを知れば知るほど、仏さまのおしえをの道を想わずにはいられないんですね。

今日、こうしてあなたと会わしていただいているということも、仏さまの大きな御力によつて会わせていただいているという気がしますからね。そういうことでいいますと、先刻申しましたように、戦争という支離滅裂な殺し合いも解けてくるんですよ。

私はね、ああいう時代に、しかも特攻という業を受けて、やつと念仏往生という教えをいただくことができたと思ふんです。もし私があつた「回天」搭乗という体験を経ていなかったら、この道に入らなかつたであろう、そういう一本の道に仏さまの御力がこうキューツと絞つてくださったんですね。私の人生全体をひとつに絞つてくださったつています。だから過去の人生を抱いて、私は押んでいける。「回天」搭乗で一度シャバを捨てましたからね、もう一度シャバを拾いなおしたような気がするんです。一度捨てたところから、人生全体を押んでいけるといふことでなかつたら、私は生きておれないといふ気がします。





後の肉体の死は、もはや本質的なことではありません。一つの通過点に過ぎないものです。「私には明日はない」という所に常に立つて、本願に導かれるまま、休む間もなく全国を歩かれる先生の底に脈打っているものは、これではないかと思えます。

軍刀の話も鮮明でした。この話しは先生の著書にも出てきますが、より率直な声をこのインタビュー記録に聞く思いがしました。

「そこで私は自分の正体を見せられたような気がしたんですよ……。」  
私はこの言葉に強い感銘を受けました。そのときの先生の驚きは、それから二十一年後の六十四歳のときの回心につながっているのだと思います。私は、これは人間の言葉ではなく、如来の光が先生の中に差し込んで、それに触れて発せられた驚きの声だと思いました。私もまた、このような光に出会い、このような言葉を発したいと強く願うものです。

このような体験をくぐって本願に出遭われ、今日も今日もと本願に生きておられるのが大石先生です。

今回は今年最後の聞法会となります。年の瀬も押し詰まり、何かとお忙しい最中だと思いますが、諸事お繰り合わせて、ぜひぜひお参り下さい。皆さん方のお出でを心よりお待ちしております。

南無阿弥陀仏

文隆拜

平成十三年十二月八日

撰 取 山 心 光 寺